

点字図書館にて

女1（早川）

女2（笹本）

男1（指導員 岸田）

椅子に座った女1と女2。対面して男1が座っている。女1、2は原稿を持っている。女1が読み上げる。

女1 あやかし小町。大江戸怪異事件帳。鳴海丈著。この図書は著作権法第37条第3項に基づいて制作しています。又貸し、複製等による第三者への提供はできません。デイジー図書凡例。この図書の階層はレベル1とレベル2です。グループ分けは行っておりません。デイジー図書凡例終わり。

男1 はい。いいと思います。では続きを笹本さん

女2 あやかし小町。大江戸怪異事件帳。特選時代小説。鳴海丈。目次。第一話、蔵の中、5ページ。第二話、出逢い、102ページ。第三話、九芒星の娘、181ページ。あとがき、272ページ。目次終わり。

男1（小さくうなずきながら）うん。はい。いいと思います。

男1 では本編に。じゃあそのまま笹本さんからお願いします。

女2 はい。

女2 第一話、蔵の中。――「――旦那、妙な娘がいるんですがね」御用聞きの岩太が、湯呑みを片手にした和泉京之介に言った。「どんな娘だ、岩太。品川の遊女屋に新しく入った妓が公家のお姫様とかいう話なら、俺は御免だよ」人の流れに目をやりながら、京之介が、岩太に穏やかに釘を差す。京之介は二十三と年は若い、北町奉行所の定町（じょうまち）廻り同心だ。眉がきりっとしていて、鼻筋の通った男らしい風貌である。いかにも

男1 はい。そこまでで。

男1 笹本さん。

男1 ちょっとまだ。あれですね。先ほどの目次の感じは良かったと思うんですけど。

女2 はい

男1 やはり物語に入ると、どうしてもね。

男1 では早川さん。同じところから

女1 はい。

女1 第一話、蔵の中。一「——旦那、妙な娘がいるんですがね」御用聞きの岩太が、湯呑みを片手にした和泉京之介に言った。「どんな娘だ、岩太。品川の遊女屋に新しく入った妓が公家のお姫様とかいう話なら、俺は御免だよ」人の流れに目をやりながら京之介が、岩太に穏やかに釘を差す。京之介は二十三と年は若い、北町奉行所の定町（じょうまち）廻り同心だ。眉がきりっとしていて、鼻筋の通った男らしい風貌である。いかにも生真面目な雰囲気だが、目許のあたりに若者らしい甘さも残っていた。背が高く、肩幅の広い逞しい体格である。この頑健な肉体は、八歳の時から朋山流（ほうざんりゅう）剣術の道場に通い、たっぷりと鍛えられたおかげであった。のんびりと通行人を眺めているように見える京之介の双眸（そうぼう）に、時折、強い光が浮かぶのは、江戸の治安維持に携わる者としての習性である。不審な者や、異変の前兆と思えるものを、見逃さないようにしているのだった。そこは両国橋の袂——両国広小路の掛け茶屋<橋屋>で、京之介と岩太は、通りに面した縁台に腰を下ろしているのだ。

十代将軍家治（いえはる）の治世——。初夏の晴れた日の、午後である。

男1 はい。そこまでで。うん。とてもいいです。とても。平坦で。

女1 ありがとうございます。

男1 じゃあ続きを笹本さん。お願いします。

女2 はい。

女2 「そんな話じゃありませんや」岩太は苦笑いをする。八歳下の京之介には、いつもやりこめられている道楽者なのだ。炭を貼りつけたような太い黒々とした眉、目玉も鼻も口も何もかも大きい剽軽な顔立ちで、ずんぐりした軀付きをしている。親しみやすい風貌で人当たりが良いから、聞きこみが抜群に上手い。顔に似合わず意外と辛抱強く、細々した調べを飽きずに続ける根気があるから、十手者向きの男であった。「年齢は十七、<うわばみ小町>って呼ばれてる娘がいます。本当の名前は、お光というんですが」「何だ、つまらん。大酒飲みの娘の話か」「いえ、大酒飲みではあるんですが…妙なのは大酒を飲むことじゃなくて。実は、このお光って娘——小町と呼ばれるくらいだから別嬪だが——摩訶不思議な力がありましてね」

男1 はい。結構です。笹本さん。

男1 笹本さん、特にセリフになるとね。どうも感情が豊かになってしまうというか。

女2 豊かでしたか。

男1 そうですね。

男1 笹本さんは、子供たちに読み聞かせするお仕事を長くやってらしたんですよね。

女2 ええ。児童館などで7年ほどやらせてもらっていました。

男1 なるほど。

男1 最初の講習でも皆さんに言いましたが、録音図書と言うのは、朗読ではないんです。

男1 視覚障がいのある方にとってこの録音図書を聞くことは、読書と同じなんです。録音図書はあくまで図書なんです。本なんですね。

男1 ですから、読み手の感情は極力入れずに読むことを求められているんです。

女2 ええ。それは。わかっているつもりなんです。

男1 第三者の感情や解釈が入ってきてはいけないんです。文書から読者が読み取る情景や感情は人それぞれです。それが読書の楽しみでもありますから

男1 いえ別に責めてるわけではないんですよ。慣れだと思っんですね。ちょっとしたことだと思っんです。

男1 そうですね。なんというか、まず。顔じゃないでしょうか。

女2 顔ですか

男1 あ、顔というかその。顔の筋肉が。顔の筋肉が豊かに動きすぎてるのかなと。

女2 顔の筋肉が。

女2 私の顔に筋肉を感じるということですか。

男1 まあ。そうですね。表情からすでに豊かに表現しすぎているのかもしれませんが。

男1 逆に、早川さんは、普段からあまり感情が外に出ないタイプなのかなと思っんですけど。

男1 ですので読み方も、とても録音図書に向いている。とても平坦で、とてもいいです。

女2 すいません。私が読み聞かせばかりしてきたばかりに。

男1 決して責めてるわけではないんですよ。

女1 それは。

女1 それは、私からは感情が感じられないということですね。

男1 ええ。それがとても録音図書には重要でして。

男1 早川さんの読み方は、録音図書としてとても正確な読み方です。

女1 よく言われるんです

女1 私としては

女1 私としてはめいっぱい感情を表そうとしても、それが人には伝わらないことが多いんです。

女1 バイト先や仕事場で必ずされる質問があります

女1 「何してる時が一番楽しいんですか」って

女1 何を考えているのかわからない。気味の悪い女だと。そう思われているんでしょうね。

男1 いや。そんなことは。

女1 招かれた食事会でも。自分では楽しいと思ってその場にいるんですけど。

女1 つまらなそうに見えるんですかね。

女1 そういう人間は次第に声がかからなくなっていきます。

女1 でもそういう部分をこうして評価してもらったのは初めてです。

女1 ありがとうございます。

男1 いえ。

男1 いや、でも早川さんの読み方は。とても良いです。うん。すごく良いです。録音図書のあり方としてとても正しいです。ぜひ笹本さんも参考にしていただければ

女2 私の読み方が暑苦しいということですよ。

男1 笹本さん

女2 私の感情表現が鬱陶しいと思われているんですよ。

男1 いや。ですから。

女2 私は子供たちに、その情景や、感情を豊かに伝えたいと思って読んできました。でもまるでそのことを全て否定されているようで。

男1 笹本さんの技術を否定してるわけではないんですよ。

女2 そうでしょうか。

男1 録音図書という特殊な読み方を理解してほしいだけなんです。

女2 私が大竹しのぶさんでもそう言いますか？

女2 例えば私が大竹しのぶさんでも、そういう指導をなさいますか？

男1 どういうことですか。

女2 私に大竹しのぶほどの表現力があれば。録音図書のあり方を超えてくるような表現力があれば、そうはおっしゃらないんじゃないですか

男1 録音図書のあり方を超えてくる表現力はいらぬんですよ。

男1 大竹しのぶさんであろうとも。録音図書は、あくまで感情を入れずに同じ読み方をさせていただきます。

女2 あの大竹しのぶにですか。勿体ない

男1 私は別に演出をしてるわけじゃないんですよ。むしろあなたの演出を入れた読み方をやめてほしいと言ってるだけなんです。

男1 それに大竹しのぶさんくらいの女優さんであれば、大竹しのぶさんの朗読でこの本を聞きたいとか、そういう要望があったりするでしょう。でもそれはあくまで朗読です。

男1 笹本さん。私は決してあなたの読み聞かせの技術にケチをつけているわけではないんですよ。

男1 では続けましょう。早川さん続きを

女1 はい

女1 岩太の説明によれば——その娘は、失せ物（うせもの）を見つれたり人を捜したりするのが得意なのだという。ある廻船問屋（かいせんどんや）では、店の金の遣いこみをしてる者の名前から金額まで、ぴたりと当てたそう。ただし、そのような＜能力＞を発揮するためには、お光はその家の一間に、半日とか一晩とか籠もらなければならない。彼女が籠もっている座敷は、絶対に襖や障子を開けてはいけなし、誰も廊下に近づいてもいけないのだ。

そして、どんな難題難問を解決しても、お光は、決して報酬のお金は受け取らない。ただ、酒を一升貰うだけだ。その酒も、閉じ籠もった座敷で、ほんのわずかな間に、ぺろりと飲みきってしまう。「そのくせ、飲み終わって帰る時も、頬が赤くもならず足取りもしっかりしているというんだから十七娘にしちゃあ、大した酒豪でさあ。もっとも、近づくと、さすがに酒のおいはふんぷんしてるそうですがね」

男1 ありがとうございます。とてもいいです。

男1 では続きを笹本さん

女2 はい

女2 「で、そのうわばみ小町が、どうしたのだ。金襴緞子の帯を締めて、めでたく酒問屋に嫁入りでもしたのか。下り酒でも飲み放題で、結構なことじゃないか」「旦那、混ぜっ返しちゃいけません。いやね、例の讃岐屋の事件ですが——」

男1 笹本さん

女2 岩太は京之介の表情を窺いながら、「その娘の力を借りちゃどうか、と思いやして」「おいおい、岩太親分。しっかりしてくれ。お前は仮にも俺の右腕じゃないか」呆れたような口調で、京之介は言う

男1 笹本さん。やめてください

男1 なぜ理解していただけないんですか

男1 これは録音図書なんです。

女2 わかっています。

男1 それにこの本に関して言えば、これは時代小説です。視覚障がいの方だけでなく誰も見たことのない情景です。

女2 だからこそ、江戸の情緒をより理解してもらおうと

男1 それをあなたの勝手な想像で再現してはいけないんです。

女2 私が志ん朝でもですか

女2 私が古今亭志ん朝でもそう言いますか。

男1 あなたは志ん朝ではない。

女2 やっぱ私が志ん朝じゃないからなんですね。

男1 あなたが志ん朝か、志ん朝じゃないか、という話じゃないんです。

男1 録音図書は落語ではないんです。

男1 笹本さん、ちょっと笹本さんは音訳には向いてないかも知れませんね

男1 もし良ければですが、音訳ではなく点訳の方の講習に切り替えませんか？

男1 点訳については2年間、書籍を点字に訳す講習がありますので、その講座を受けていただき、点字図書の製作に協力していただければ

女2 戦力外通告というわけですね

男1 録音図書には不向きなのではないかと。どうしても感情が入り込んでしまうようですので、

女2 岸田さんこそ。私に対して、なんていうか、そういう感情が入ってたりしないでしょうか。

男1 何ですか。そういう感情というのは。

女2 市内の方が、避難してきている私たちをどう思ってるか。私何となくわかってますから。

男1 何ですか。

女2 戻ったら賠償金が出なくなるからいつまでも戻らないんだろって。

女2 そういう風に思われてる方がいること私知ってるんです。

男1 笹本さん。何言ってるんですか。

女1 岸田さんがそう言われたんですか

男1 言ってませんよ私そんなこと

女2 直接言われたわけではないですけど。

女2 なんていうかそういう空気を感じます。働かなくても毎月貰うもん貰って。悠々自適ですねって。

男1 ちょっと待ってください

女2 早川さんは今日からですからいらっしゃらなかったけど。

女2 1回目の講習の打ち上げで。そのような発言がありました。

女2 避難してきた人たちの方が、よっぽど海外旅行行ってますよねって。

男1 それ私ですかね。本当に。

女2 2軒目のたこ焼き BAR のお店です。

男1 私そんなこと言いましたか

女2 その時は結構お酒も入られてたみたいですけど。

男1 いや。もしかしたらあれですかね。

男1 同じような被害に遭っていても、指定された区域でないというだけでお金がもらえない方がいる。それはおかしい、というような話はしたかもしれません。それを何か変に誤解されてるんじゃないですか

女2 でもその区域の線引きをしているのは私たちではないのに。あんな言い方をするのは変です。お門違いだと思います。

男1 ですから、そんな

男1 それこそ今そんな話を持ち出すのは御門違いじゃないですか。変ですよ。それとこれとは話が別です。

男1 私はそんなことを理由に笹本さんに意地悪をしているわけではないです。

女2 そんなこと？

男1 ですから、そういった意識の問題ではないです。読み方の問題です

男1 録音図書においては、読み手が読者と図書の間に入り込むことは許されないんです。作品に介入しないでくださいと言ってるんです

女2 とても疎外感を感じます。

女2 立ち入るな。干渉するなということですよ。

男1 そういう言い方はやめてください。
女2 私が賠償金をもらっているからそういうことを言うんじゃないんですか
男1 それとこれとは話が違うでしょ。ごっちゃにしないでください
男1 そういう感情の押し付けが読み方にも出ているんじゃないですか

男1 私が問題にしてるのは、そういうことじゃないんです。
男1 そうやってすぐ問題をすげ替える人間性の方に問題を感じます

女1 「旦那、混ぜっ返しちゃいけません」

女1 「旦那、混ぜっ返しちゃいけません」

男1 なんですか早川さん

女1 「いやね、例の讃岐屋の事件ですが」

女1 岩太は京之介の表情を窺いながら、「その娘の力を借りちゃどうか、と思いやして」

男1 なんのつもりですか

女1 「その娘の力を借りちゃどうか、と思いやして」

男1 私に対する抗議のつもりですか

女2 「旦那、妙な娘がいるんですがね」
男1 笹本さん。やめてください
女2 「旦那、妙な娘がいるんですがね」
男1 笹本さん。
女1 「どんな娘だ、岩太。品川の遊女屋に新しく入った妓が公家のお姫様とかいう話なら、俺は御免だよ」
男1 もういいです。お二人とも今日はお帰りください
女2 「そんな話じゃありませんや」岩太は苦笑いをする。
男1 やめてください
女1 「もっとも、近づくと、さすがに酒のにおいはぶんぶんしてるそうですがね」
男1 酒の場の発言で私を吊るしあげようと言うんですか
女2 「旦那、混ぜっ返しちゃいけません」

男1 言いたいことがあるならご自分の言葉で言ったらどうですか
女1 この図書は著作権法第37条第3項に基づいて制作しています。
女2 又貸し、複製等による第三者への提供はできません。
男1 お二人揃って私を悪者にしようというんですか
女2 第二話、出逢い、102ページ。
男1 そうですか。では早川さんも音訳の講習は打ち切るということでいいんですね
女1 この図書の階層はレベル1とレベル2です。
女2 グループ分けは行っておりません。
男1 わかりました。もういいです。

部屋から出て行く男1

女2 デイジー図書凡例終わり

女1 十代将軍家治の治世——初夏の晴れた日の午後である。